

論文

日本軍軍事施設から多文化的国民空間へ

——^{サンチョン}三重市における空軍一村を中心に——

倉本 知 明*

はじめに

清朝巡撫劉銘傳は、光緒十五（1889）年、台北とその近郊を結ぶ交通インフラの整備という目的から、台北城内と対岸の三重埔を結ぶ木橋（現台北大橋）を淡水河へと架設した。全長1470メートル余りもあったというこの長大な木橋は、大正十四（1925）年、交通量の増加と度重なる台風被害によって、台湾総督府により現在の鉄橋の形へと再建されることになったという。鉄橋から淡水河へと沈みゆく夕日の美しさから、橋は当時より「台北八景」の名で親しまれ、多くの人々はその姿を一目見ようと遠方より訪れたと言われている。

現在もしもあなたが台北市内からその橋を渡り、煌びやかなネオン輝く正義南路を十分ばかり南へと下ってみれば、きっとその場には似つかわしくないと思うような赤茶けたレンガの壁と、古びた一群の家屋を目にすることになるだろう。高層ビルが所狭しと立ち並ぶその街で、そこだけはまるで街の喧騒やネオンの光が吹き消されたかのような暗闇と静寂さが漂っている。大通りに面した入り口付近には「外車請勿入（外部の車は入らないで下さい）」と書かれた注意書きが壁から突き出たポールにまるでしがみつくように引っ掛かり、時折隣接する淡水河から吹きすさぶ強風にパタパタとその身を震わせている。

あなたはここがいったいどういう場所であるのかきつといぶかしむに違いない。しかし心配するなかれ。壁に立て掛けられた金メッキの住所標識には、太くしっかりとした黒文字でそこがいったいどういう場所なのかを訪れた人々に知らせてくれる。

空軍三重一村。それは民国四十三（1954）年、中華婦女反共抗ソ聯合會¹の援助によって「反共復国」「大陸反攻」という「聖戦」を完遂する国民党軍人とその家族たちの生活を保障するためにこの地に建設された眷村のひとつ。村の周囲には光興小学校や同安公園などの公共施設が隣接しており、その総面積はおよそ1.4平方km、村内には59戸の家屋におよそ400人ほどの村民が生活していたが、村が公園予定地として三重市当局から「公36号予定地」として指定されたことから、村民の大部分は隣接する板橋市の国民住宅への移転を開始しているという。

2006年9月、ぼくはこの空軍一村村内の自治会館で開催されていた「後【引用者注：ポスト】眷村時代－眷村文化園区營造論壇」という会合に参加していた。そこでは外部NGOである中華民国專業者都市改革組織（略名OURs）と村民の一部有志たちが協力して、行政指定された「公36号予定地」こと空軍一村を「眷村文化公園」として保存する為の活動に加え、台湾各地で現在その姿を急速に消しつつある眷村とその文化に対する勉強会などが継続的に開かれていた。そこでは毎週あらゆる分野の専門家たちが眷村について簡単な報告をし、またそれに対して村民たちの間で様々な議論がなされてきた。

部外者の、しかも外国人であったぼくが会合に参加したことは、当初彼らをひどく驚かせたようだった。村民たちの言う「日本鬼子来了（日本鬼子が来た）」という冗談も、当地に留学中であったぼくにはひどく新鮮なものに聞こえた。「日本鬼子」とはそもそも抗日戦争中に大陸の中国人が侵華（中国）者である日本軍に対して使っていた言葉であり、それを現在の台湾で聞くとはい思もよらなかったからだった。かつての大日本帝国の植民地であった台湾において、植民地主義的暴力の記憶ではなく、その外部で演じられた反帝国主義の記憶が彼らの口をついて出たことは、眷村という土地の持つ複雑さを少なからずぼくに感じさせた。

キーワード：眷村、多文化主義、記憶、和解、国民（公共）空間

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 共生領域

しかし、そもそもなぜ空軍一村は保存されねばならないのだろうか。様々な文化や歴史がひしめき混交し合う台湾という土地において、なぜ眷村文化が保存に値すると（少なくとも彼らは）言い得るのだろうか。

「空軍一村、眷村文化はどうして保存されなければいけないのでしょうか？」会合の中心的存在の一人であった王継新村長は、ほくの不躰なこの質問に笑顔で次のような応えてくれた。

眷村は台湾において既に六十年以上の歴史を持っている。1949年から、大陸から台湾へ渡って来た軍人の数はおそらく百万人をくだらないはずだ。もちろんそこにはその家族もいたわけであって……台湾へやって来て、そして落地生根。こんなにも多くの人々が、この土地において生きてきた。もしこのように多くの人々の歴史を、眷村文化を保存しないなら、非常に残念なことではないだろうか？こんなにも多くの人間が、ここで生きてきた。五十年、六十年もの長い間。このような人々の生命経験を保存しないとすれば、それは間違いなく台湾近代史における大きな損失になるだろう。

王村長の力強い言葉に、ほくは微かな違和感のようなものを感じた。台湾近代史における大きな損失。空軍一村の保存にあたって、王村長は確かに台湾近代史の中にその居場所を求めようとしていた。民進党族群事務局によって発行された『認識台湾眷村』（2006）においても、王村長は眷村文化の保存活動の意義に関して次のように語っている。

最も重要なことは、眷村文化は台湾近代史の一部であり、また台湾が多文化社会へと自らを邁進させているということにある。（『認識台湾眷村』「即将搬遷の空軍三重一村」2006：221-15）

三重を「我が故郷、永遠の故郷」と述べる王村長は、そこに生まれた眷村文化を「台湾多元文化の生命」とであると語っている。

冷戦時代、国民党政府の唱える「反共復国」というイデオロギーの下に生まれた眷村は、戒厳令体制下において一貫して国民党政権の正統性を保障するための政治空間であった。しかし1980年代以降、民主化（本土化）が進む現在の台湾社会において、それらは急速な勢いで都市の中から姿を消しつつある。眷村が軍事（戒厳令）的空間から他の族群（エスニック・グループ）に開かれたある種の国民的空間へと変容していく中で、王村長が語ったような多文化主義の言説は一体どのような役割を果たしているのだろうか。また眷村が現在の台湾において多文化融合を「国是」としたある種の国民的空間へと変容していく中で、眷村の成立以前にその空間を軍事的に切り分け、統治の対象と看做してきた日本植民地主義の記憶は、いかなる形でこの国民的空間の成立に関わろうとしているのだろうか。村民たちがほくに向けて発した「日本鬼子」という冗談は、眷村が決して日本の過去と切り離された位置にはないということを示唆していたのかもしれない。

これら一連の考察を進めるにあたり、本論では先にあげた空軍三重一村をその中心として取り上げ、「戦後」三重市における二つの移民ラッシュの流れを一個の糸口に考察を進めていきたい。

1. 三重における二つの移民ラッシュと空軍一村

I. 「継承」された軍事的空間 - 第一次移民ラッシュ -

1945年8月における大日本帝国の崩壊は、東アジアにおける人口移動の方向性の流れを大きく変えることとなった。大陸で打ち続く動乱と国民党の台北遷都に伴い、当時多くの政治難民たちが大陸各省から「共匪」の脅威の及んでいない台湾への移動を開始していた。

その様子を『台湾歴史年表』は次のように記録している。

大量の飛行機が上海から絶え間なく飛んでは、政府要人やその家族を乗せて大陸から逃げ出していた。港や政府関係機関、学校などは難民たちで溢れかえっており、各地の物価は高騰し、市場は日用品などをわれ先に買

い求めようとする群集で混乱状態に陥っていた。(『台湾歴史年表』1990:256)

自力で亡命を行えるような富裕層に続くように、国民党の台北遷都(1949)では多くの軍人やその家族たちが政治難民となって台湾へと流入し始めていた。国防部史政編譯室によって2005年に編纂された『國軍眷村發展史』において、1949年から51年の間に大陸から台湾へと渡って来た国民党軍人の数は非正式統計によればおよそ60万人、またその家族は15万人にも上るとされおり、この「大型移民ラッシュ」の受け皿として眷村は台湾各地に建設されていった²。

來台当初、これらの眷村はあくまでも「大陸反攻」成功までの仮住まいであり、そのため渡台者の多くが旧日本軍軍事要塞や都市部の官営宿舎などを接収し、それらに多少手を加えることで引き続き使用することが多かったという³。しかし冷戦体制が長期化するに従って、政府は軍人たちの精神的安定と政治的支持を取り付ける意図から、やがてこれらの軍人やその家族たちの基本的な日常生活を保障した上で管理する方針へと切り替えていくこととなる。

このような背景の下で、空軍一村も三重においてその建設が進められてゆく。鄭政誠は当時台湾北部へ來台した外省人の多くが、台北市とその郊外都市(中永和、新店、板橋、三重など)へ居住した点に着目し、この時期を「外省移民期」として位置づけている(鄭政誠1996:42-5)⁴。

三重市政府によって編集された『三重市志續』において、1950年代に起こった外省人の急激な人口流入は例えば次のような形で記述されている。

民国四十(1950)年代、台北県における最も注目すべき外来人口は外省人であり、大量の公務員、軍人、政治難民などが戦後の第一波移民人口を形成した。彼らは台北県人口の11.9%に過ぎなかったが、それでも客家人人口の五倍であり、中和市人口の四割、新店市の三割、板橋・三重両市人口の実に二割を占めていた。これらの諸都市は台北とは緊密な関係性にあり、この外省人の人口比率の高さは実に政治的な意味が大きかった。また彼らは集合居住して生活する傾向があったため、独特な眷村文化を形成し、これによって三重市の族群の多様性はさらに豊富なものとなったといえる。(『三重市志續』「第二節；外省人與眷村文化」2005:140-3)

眷村における「集中管理・集中居住」といった生活形態は、主に国共内戦という戦時動員体制の一環として法令化⁵され、それらはまた都市部の空襲被害などを抑制するという意味合いから大都市の周辺に分散して建設されることが多かった⁶。そのため三重でも空軍一村、二村、建国一村(空軍)、行建新村(軍管理部)、中興新村(憲兵司令部)など多くの眷村が国軍の三重進駐とともに建設されている⁷。

国共内戦の延長線上に眷村が建設されたことは、台湾が光復後においても依然として戦時体制下にあったことを意味しているが、しかしなぜ台湾において、またとりわけ三重においてこうした戦時体制の確立が容易に実行され得たのだろうか。言葉を変えれば、それは「確立」されたのではなく、「継承」されたと言えはしないだろうか。そしてもしそれが継承されたとするならば、それはいったい誰から誰の手へと継承されたのかが問われねばならない。

この件に関して鄭は、光復後台湾の重工産業が三重など台北近郊の諸都市へと集中した理由を日本帝国主義の「侵華戦争」と「南進政策」との関連から論じている(鄭政誠1996:95-1)。日本統治期を通じて農業と軽工業中心の産業構造を有していた三重は、太平洋戦争の勃発によって台湾が南進の前線基地の役割が重視されるようになるにつれ、鉄鋼、重機器、石油などの重工業地帯として注目され始めたという。

三重市が開催した座談会において、王申文は当時の様子を次のように振り返っている。

光復前の民国三十(1940)年頃だったかな。中央南路68号付近の福祉社の辺りに、「台湾機器株式会社」ってのがあったんだ。日本時代にはそこで三八式歩兵銃を作ってた。工場内には労働者が百人ほど働いててな。でも戦争が終わってから会社もなくなっちゃった。日本人の社長の名は確か捨川とかなんとか。出勤時はいつも乗馬用の長靴にラッパを携えて、三輪車に乗ってやってくるんだ。その様子といたらまるで将校みたいでさ。(『三重市志續』「付録二耆老座談篇」2005:473-17)

光復後台湾総督府による一連の都市規格を模範とした国民党政府は、引き続き三重など台北市郊外の諸都市を重工業地帯として指定した。中でも三重に展開する工場数は群を抜いており、1950年初期における台北各県の工業工場数比較では、板橋市の三倍、淡水市のおよそ九倍にものぼっていた（『臺北縣統計年報』第1期1952：81）。

このような戦時体制「継承」の流れは、1950年代に建設された少なからぬ眷村が旧日本軍の関連施設跡に建設されたことを見ても明らかだといえる。そしてそのことは空軍の高射砲部隊が多く進駐することとなった三重においても同様であった。空軍一村の村内には旧総督府を米軍の空襲から防衛するために建設された高射砲陣地跡があり、周囲は日本時代から続く軍事的空間であったといえる。

空軍一村の村民で、かつて高射砲副司令を勤めていた朱邦煦は、高射砲跡地が若い村民たちから防空壕跡地だと誤解されていることについて次のように述べている。

元々あそこは防空壕なんかじゃない。日本人が大砲を設置してたんだよ。確か六門。どの門にも大砲を撃つ場所が設置されていてな。実際、あそこは防空壕なんかじゃなかった。砲弾や燃料がそこには置いてあったんだよ⁸。

また李俊賢は高射砲跡地に関して次のような説明を加える。

第二次大戦期、日本が占領する台湾は戦略的に非常に重要な位置にあり、自然と米軍による空襲の目標地点となっていた。当時の空軍一村には日本軍の高射砲陣地があって、総督府付近の防空を請け負っていた。大戦が終結すると、国共内戦に敗れた国民党軍が台湾へと撤退を始めていた。しばらくして、今度は空軍高射砲司令部が三和路の光栄中学校跡地に進駐を開始してきた。民国四十二（1953）年の頃、高射砲の官兵の家族たちを安置するという目的から、婦聯会の援助の下に日本軍の高射砲陣地跡地に今の空軍一村が建設された。付近にある二村、それに建国一村も同様に高射砲部隊に属したものだ。（『認識台湾眷村』「打造眷村文化園區的区空軍三重一村」2006：68-12）

こうして「大東亜戦争」という「聖戦」を完遂させるために淡水河畔に建設された日本軍の高射砲陣地跡地には、「反共復国」という新たな「聖戦」を完遂させるため、空軍一村が建設されることとなった。このような旧日本軍軍事施設への国民党兵士とその家族たちの流入は、眷村の建設という形を取りながら、内地人が「日僑」として日本本土へと引き上げていくその穴を埋める形で進められていくこととなっていたといえるだろう。

II. 「不可視化」される空間 - 第二次移民ラッシュ -

第一次移民ラッシュによって大陸から台湾へと流入した軍人とその家族たち。三重市当局の言葉に従えば、彼らは「戦後の第一波移民人口」を形成することで、「三重の族群の多様性」を「豊富なもの」としてきた。第一次移民ラッシュにおいて成立した眷村建設の特徴が、「鬼畜米英」から「殺朱拔毛」⁹へ至る戦時体制の「継承」であったとすれば、第二次移民ラッシュにおけるその特徴は、眷村の「不可視化」にあったといえる。しかし眷村の「不可視化」とは一体なにを指し、また何を意味しているのか。

鄭政誠は1960年代以降に台北を中心とする北部諸都市が急激な工業化を進める中で、中南部の労働人口が仕事の機会を求めて北部へと流入していったことを指摘している（鄭政誠1996：72-8）。三重における外省人移民の数は1956年をピークとして下降傾向にあったが、雲林、嘉義、彰化など中南部からの労働移民の数は1970年代前半より逆に上昇しており、三重市当局はこれを「島内城郷移民」として定義している。『臺北縣統計要覽』によれば、三重における本籍地人口（三重市民）と本省他県人口（中南部移民）は、1976年を境にその人口比率を逆転させており、現在における三重の人口構成の大部分が1970年代以降の中南部からの労働移民によって構成されていることが伺える。

1970年代から始まったこうした急激な都市化の動きは、当時台湾の国内外に連続して起こった急激な変化と関係していた。羅於陵はこれを国連脱退（1971）に日華断交（1972）、蒋介石の逝去（1975）に米中国交回復（1979）と相次ぐ国際的孤立化に加え、国内で盛り上がりつつある民主化の動きを受けた国民党政府が、政権政党の正統性の

根拠を従来の「反共復国」から「経済発展」による富の蓄積へ転換し始めたことにあったと分析する（羅於陵1991：78）。国民党政府によって1970年代にうち出された産業構造の大規模な転換に基づいた一連の経済発展政策¹⁰は、地方から都市部へという大規模な労働移民を生み出し、その流れは第二次移民ラッシュとして本省人、外省人を巻き込んだ大規模な人口移動を生み出す結果をもたらした¹¹。

『三重市誌續』によれば、1976年時点でこの「島内移民ラッシュ」により、三重における第二次産業人口は飛躍的に上昇し、その割合は1963年時のおよそ二倍に達したという（『三重市誌續』138-9）。

しかし一方で、このような急激な人口移動は都市内における非雇用者を大量に生み出す結果にもつながり、北部の大都市では雇用から溢れた多数のホームレスが生まれ、特に台北や三重、板橋などの諸都市では当時大きな社会問題となり始めていた。

空軍一村に隣接する台北大橋付近には当時多数のホームレスや浮浪者が居住しており、林書玄はその当時の様子を、三重市耆老座談会において次のように語っている。

蔣総統が台北から橋を渡って来られた時、台北橋から台北市内の清潔な様子が見えたのですが、三重市に入って下車してみると橋の下には乞食などが住み着き大変乱雑な様子だったのです。乞食だけでなく中には逃亡兵や退役軍人までおり、彼らは乞食たちと雑居して生活していました。現在の環河南路、「那吨公」一帯に非常に多かったと思う。蔣総統は当時の市長李火土に命じて状況を改善させようとししました。台北県政府公務局の指示により、三重市役所は彼らの立ち退きを計画し、環河南路の乞食街を排除しようとし、当時私もその計画に参与監督していました。しかし一部の退役軍人たちは立ち退きに断固反対し、市役所も強制立ち退きまでは踏み切れず中央から派遣された役人たちの強制執行任務とされたのですが、蔣総統からの命令だと聞くやいなや彼らは皆無理を言わずに役所の強制立ち退きの前に自主的に立ち退きを始め、事件は平和的に解決しました¹²。（『三重市誌續』「付録二耆老座談篇」2005：551-17）

この「平和的に解決」した台北大橋の乞食街の排除は、現在まで続く三重一般に対するイメージと強く結びついている。空軍一村の保存活動を進める董俊仁（OURs代表理事）は、三重一般に対する印象を自ら次のように語る。

三重の一般的な印象についてどう思うか。緑色に、不衛生、乱雑な街並み、それにたくさんの黒道。おそらくこんな感じでしょう。¹³

台湾において「緑色」とは民進党を、また「黒道」とはヤクザなどの裏社会を意味している。三重には、董が述べるような「党外活動の聖地」としての民進党支持者の都市といったイメージが根強く、このことは三重の住民の多くを本土色の強い中南部からの移民が占めたことと関係している。

ここで留意すべき点は、1970年代より始まったこの第二次移民ラッシュと呼ばれる人口移動が、三重という都市に二つの異なったイメージを与える結果へと繋がったということにある。この二つのイメージが重なり合う三重において、眷村という空間は不可視な存在として後に「党外勢力のオアシスであり、また民主の聖地であった三重においても五村の眷村があった」（『認識台湾眷村』「蛻變展翅」2006：40-12）という驚きとなって現れる。

反共の「模範的文化」（羅於陵1991：65）として成立したはずの眷村が、第二次移民ラッシュの流れの中で土着（台湾）社会の中へと埋没していったことは、もはや眷村と、またそれによって表象されていた政治的イデオロギーが社会的な意義を失い始めていたことを意味している。こうして三重における眷村の存在は第二次移民ラッシュによって「不可視化」され、後に「移民都市三重」という新たな言説によって再び「発見」されることとなる。

それでは空軍一村が三重市当局のいうような「移民都市」という言説の中で「発見」されたとするならば、その移民都市という言説を生み出すに到った台湾社会の変容とは一体どのようなものであったのだろうか。言い換えれば、どのような社会的な要請が三重市に「移民都市」という言説を肯定的な意味において使用させるに到ったのかを考察する必要があるだろう。

2. 要請された多文化主義

それでは台湾において「大陸反攻」「反共復国」といった政治的イデオロギーが減退し、多文化主義¹⁴という言葉が公に唱えられ始めたのはいつの頃からなのだろうか。張茂桂の指摘に従えば、それは1990年代中期以降、多文化主義という用語が聯合報などの新聞メディアで急速にその使用頻度が増加していった頃にあたるといえる（張茂桂「台湾は多元文化國家!？」『文化研究月報』第十三期2002）。

それではこの多文化主義という言葉が強調される以前の台湾では、多様な族群と文化的多様性という状態は存在しなかったのでしょうか。本島人の皇民化や台湾社会の中国化が唱えられていた頃の台湾には多文化状態は存在せず、またすべての土着文化は当局者の手によって平板・画一化されたものであったのだろうか？答えはおそらく待つまでもないだろう。多文化主義が唱えられる以前から台湾の文化的多様性は豊富であったし、それは台湾を多文化的な島として統治の対象と看做してきた日本植民地当局にとっても同様であったはずだ。西川長夫が指摘するように、多文化主義とは決して状態としての多文化から発するものでなく、あくまでそれが必要となった国や地域において語られ始める（西川2003）。

それでは台湾における多文化主義とは、どのような社会的要請から生まれてきたものなのだろうか。

例えば次の場面を見てみよう。

老曲「親父、ここで鶏を売ってるって聞いたんだがね・・・」

阿發兄「ニワ……なんだって？」

老曲「鶏だよ」

阿發「鶏のことを言ってんのさ」

阿發兄「ああ、鶏か。ちょっと待ってくれよ。さあこれだろ？さあ、鶏だ」

老曲「ああ、そうそう」

阿發兄「こいつはみんな俺が飼ってるんだぜ。で、いくつ欲しい？」

老曲「高いだって？」

阿發兄「ああ、いくつだい？」

老曲「おらが欲しいのは普通のやつだ」

阿發兄「フツー？なにがフツーだってんだ？そんなもんねえよ。フツーだったってなあ……。あんた鶏が欲しいんだろ？いくつ欲しいんだよ」

老曲「おらあ普通のが欲しいんだ。高いのなんて必要ねえ」

阿發兄「だからフツーってなんなんだよ。あんたが欲しいのは鶏で・・・」

これは1950年代末、忠貞二村という眷村に暮らす邵一家の波乱の人生を描いた『再見忠貞二村（さよなら忠貞二村）』¹⁵というテレビドラマの一場面。山東省出身の老曲が息子を連れて市場へ鶏を買いに出かけるシーンである。ところが台湾語しか解さない本省人（阿發兄）相手に老曲の交渉はなかなか思うように進まない。一向に交渉が進まないことに業を煮やした阿發の兄は、弟の阿發を老曲の前へと引き摺り出す。

阿發兄「だからいくつなんだよ。あんたが欲しいだけつかまえてやるって言ってんだろ。ああ、もう。阿發、こいつに言ってくれよ。これが鶏だって。欲しいだけつかまえてやるってさ。この外省人、一体何言ってんだかさっぱり分からねえよ。阿發、お前からちょっと言ってくれ」

両者の意思疎通は思うようにならず、また北京語の「高い」と台湾語の「いくつ」などといった同音異語も入り混じり（共に「グイ」という発音）、老曲は鶏一羽満足に買うことが出来ない。ただ年若い阿發だけが、戦後の「国語（標準北京語）」教育のおかげで両者の会話を理解できる位置に立っている。

両者の会話が行き詰まりを見せたその時、市場に突如轟いた爆発音を耳にした老曲は慌てて息子を抱きかかえて

地面へと倒れこむ。それが前線での勝利（金門島における八二三砲撃戦）を知らせる爆竹音であることを知っている阿發の兄は、老曲のその大げさな態度に笑いを禁じえない。

老曲「早く伏せろ！砲弾が・・・伏せるんだ！」

村長「みんな聞いてくれ！空軍大勝利！我が軍再び勝利せりだ。いやはや大したもんだ！」

老曲「なんだあ。ただの爆竹か」

笑いを押し殺す阿發の兄。

老曲「なんだ。なにが可ましい」

阿發兄「いや、だって爆竹くらいでね。そんなところにあんた寝転ろがって、いったいなにをしようってんだい？」

老曲のとった咄嗟の態度に、阿發の兄は老曲たち外省人たちが経験したであろう大陸での「戦争」経験を読み取ることが出来ず、それはただ嘲笑となって目の前で無様にうずくまる中年男性を見下ろしてしまう。日本の植民地統治を受けてきた本省人と大陸での抗日経験を経て台湾へと渡って来た外省人。「戦後」における両者の遭遇は、老曲と阿發兄の会話に見られるような奇妙なズレを社会の到る所で生み出してきた。

この件に関して陳光興は、台湾における本省人と外省人の間にはある種の主観的情緒構造のズレがあることを指摘している（陳光興2002：270）。陳はそのズレの理由を、外省人はその抗日経験によって本省人の日本植民地期への思い入れと苦難を理解出来ず、一方で本省人もまたその植民地経験によって冷戦による強制的な移動を経験させられた外省人の苦しい戦争経験を理解出来ないためと分析している¹⁶。言い換えれば、現在の台湾社会において植民地主義と冷戦体制が交錯する構造の中で生み出されてきたこの二つの異なった情緒構造が、両者間の情緒感情のズレや政治的摩擦を生み出す原因となってきたのだということだろう。

台湾の「祖国」復帰後、外省人たちによってかまびすしく議論された台湾人奴隸化論争や、それに基づく本省人の社会・経済的な公的領域からの排除、またそれに続く二・二八事件などは、このような主観的情緒構造のズレの下で、「外省人」は「やつら」として「中国人」となり、「われわれ」は「中国人」とは異なる「台湾人」として意識され始める要因となってきた。戒厳令体制の下で沈黙を強いられてきたこれらの言説は、戒厳令体制の解除（1987）と急激な民主化の流れの中で爆発的な増殖を見せ、その一部は再植民地化（国民党独裁期）の記憶として現在の台湾独立論や台湾民族主義の言説へと受け継がれている。

しかし陳水扁の総統就任（2000）以降、各族群の主体性や、その言語・文化を尊重しようとする文化的多様性に関する言説は、従来の「大中華主義」言説に代わって公式の場で数多く語られ始める。2001年には中華民国の国是としての「多文化主義」が主張され始め、また2004年には民進党によって台湾版多文化主義宣言とも言える「族群多様・国家一体」宣言がなされている。

張茂桂は台湾における多文化主義言説の誕生を、前述したように1990年代中期以降としながらその発端を原住民の権利運動の中に求めている。張は原住民権利の向上を目指す原住民運動家と一部の政治家たちが、1997年の憲法修正時において、「中華民国憲法増修條文」第十條第九項及び十條に以下の条文を盛り込んだことが、現在の台湾における多文化主義言説の爆発的な増加の一因となったと分析している。

その条文は以下の通りである。

国家は多元文化を肯定し、さらに積極的に原住民族の言語と文化を維持発展させる。

国家は民族意志によって、原住民族の地位及び政治参与、並びにその教育文化、交通水利、衛生医療、經濟土地及び社会福祉事業を保障し、その扶助と発展を促進する。それらの方法は別途法律において規定するものとする。金門、馬祖地区の人民においてもこれと同等の扱いとする¹⁷。

張は原住民の法的地位に関するこの条文には二つの大きな意味があると説明する。それはまず第一に、「原住民族」という言葉が憲法内に記入されることで、台湾が正式に多民族により構成される主権国家であるという事実が広く

認定され、「民族自治」や「原・漢民族共治」という可能性が生まれたということ。そして第二に、多文化という概念の登場によって、それが原住民族を指し示す概念にとどまらず、台湾社会全体の多民族（族群）化という根本方針を確定したということの二点である。

台湾におけるこのような多文化主義の流れは、統一・独立問題、あるいは党内の主流派か否かを問わず、多くの政治エリートたちが手放しで受け入れてきた。張はその理由を台湾社会における「和解」の作業と強く結びつけていたことを指摘している。

社会に広がる植民地、あるいは冷戦時代の強烈な記憶や経験といったものが、統一独立問題や政治衝突に関する和解を成立し難いものとしていた。そうして二つのグループの間におけるこのような政治的な対立が、両者の政治エリートたちにこの新たな語彙への関心を喚起させることとなった。

(中略) …「多文化主義」という一個の集合体的な「共同善」の基礎を通じて、あるいはもしかしたら社会における差異と政治対抗の作用を緩和出来るかもしれないと思ったのであった。少なくともこれは「^{ポリティカル・コレクティブネス}政治的正確」と「族群間の和解」への有効な方法でもあった。(張茂桂2002)

そもそも原住民の権利要求の手段であった多元文化という言葉説を、台湾社会全体の政治的対立（省籍矛盾）へと引き伸ばすことによって、多文化主義は民主化以降、社会内部に広がりつつあった深刻な政治対立を克服する方法として「発見」され始めることとなる¹⁸。

王甫昌は1995年に民進党が「大和解」と「大聯合政府」を提案し始めたことについて、外省人の選挙票の取り込みの側面があることを認めながらも、それが台湾内部における深刻な族群対立を解消するためであったとして、民進党が提案した「大和解」には省籍間の和解の重要性が強調されていると述べる。(王甫昌2003:160)

張・王両者に共通するのは、多文化主義という選択が、社会における族群間の対立を緩和する、「和解」の方法として生まれたというとらえ方である。

しかし「和解」は本省人／外省人という社会内部に広がる政治的対立を緩和する一方で、老曲たち眷村住民の持っていた複雑な歴史経験を、台湾近代史の内部へと回収してしまう危険性を常にはらんでいる。多文化主義が高らかに称揚される現在の台湾で、老曲と阿發の兄が経験したような異文化間においてしばしば生まれる奇妙な会話の「ズレ」は、多文化状態が肯定されているはずの今日ではもはや顕在化することは少ないのではないだろうか。両者の間で「和解」が進められることによって、彼らは均質の国語（標準北京語）を喋り、同様の歴史（台湾近代史）の中に身を置く、同様の国民（台湾人）となる。

ではこのような作業が進行する中で、果たして眷村という空間はどのような位置づけを与えられようとしているのだろうか。

3. 多文化的国民空間の創造と隠蔽される過去

それではここでもう一度、空軍一村の保存活動へと立ち戻ってみよう。三重市当局が掲げる「移民都市」という言説が、1990年代以降このような「政治的正確」を背景として登場してきたことは間違いないといえる。しかし三重を一個の「移民都市」として定義する際に中南部からの労働移民のみを取り上げてしまえば、それは「族群の多様性」を称揚することにはならない。そこで三重における移民の流れが形成した緑（民主勢力／民進党）と黒（ヤクザ）社会といった都市イメージに、眷村の青（国民党／外省人）¹⁹を加えることによって、「移民都市三重」という言説が塗り重ねられる形で構築されていくこととなったといえる。

董俊仁は空軍一村を保存する理由を眷村文化空間の保存と多元文化社会創造にあるとしながら、それを「三重の文化と都市イメージを向上させる絶好の機会である」と述べている。三重の都市イメージとは、「不衛生、乱雑な街並み、それにたくさんの黒道」といったステレオタイプ化されたイメージであり、眷村の保存活動はそのイメージを大きく転換させられるという。

董は次のように述べる。

私はもし空軍一村が改修保存されることになって、「三重市眷村文化公園」として生まれ変わることが出来ればと想像するんです。その時、人々はきっと三重市民を尊敬し、度量もあり、包容力もあり、おまけに多元族群文化に対する価値観まで持ち合わせていると思うことになるだろうって。これが我々の努力する目標なんです。(民主進歩党族群事務部2006:42-19)

これらの目標を達成するため、2006年夏には三重青少年基地によって三重市眷村文化歴史探検隊活動が開催される。この活動において空軍一村は三重の青少年たちが眷村文化と族群の多様性を知る場としてクローズアップされている。

活動に参加した少年たちの多くが活動以前に空軍一村の存在を知らず、そこを世間から隔絶されたような場所で、駐車場かただの住宅地だとばかり思っていたと述べていることは「党外勢力のオアシス」であった三重という場が形成した典型的な眷村観の現れであるといえるだろう。少年たちは空軍一村内で眷村の文化や歴史について話し合った後、二・二八事件や省籍矛盾の原因について討論し、相互理解と和解の重要性を確認し合っている。

活動参加者の少年の一人は、眷村認識の重要性を次のように語る。

大部分の人たちは三重のことを党外活動、民主の聖地か、あるいはヤクザの巣窟だってふうに思ってる。しかも僕がこれまで接してきた歴史や文化ってものの多くは南部からの人間が中心になってきたものばかり。だから三重に眷村があると聞いたときは、本当になんていうか奇妙な感じがしたんだ。僕は自分を三重の人間だと思ってる。だからこの土地で起こったことをちゃんと知ってほしい。ここは僕の故郷で、だからこそ僕にはこの歴史を知る必要があるように思うから。たとえそれが少数者の眷村の文化であっても、やはり僕はそれを知りたい。(人本教育文教基金2006:32)

また、ある少年は次のように語っている。

元々僕は外省人についてあまり理解してこなかった。ただ知ってたのは、僕たちと彼らはずっと衝突してきたってことだけ。でも今回の活動に参加して分かったことは、僕たちはやっぱりみんな同じだってことかな。(同上2006:33)

彼らの意見から読み取れるものは、空軍一村という空間を通じた「郷土」の再認識であり、またそれまで不可視化されていたはずの他者との邂逅、そして和解である。

洪醒漢は再建後の眷村空間の変容に関して、政治的神話空間(鉄票区)の減退と共に、空間主体の多元化という点を上げている(洪醒漢2002:110)。洪のこの指摘に従えば、かつての空軍一村における空間主体は「反共復国」を目指す軍人とその家族たちであったが、現在では「多元文化」を称揚し、それを実践する市民たちがこれに取って代わったといえる。国民国家の法的秩序に自身の生まれを書き込み直す作業において、眷村やその住民といったかつてその生まれを外部(中国大陸)に持っていた存在は、「新住民」あるいは「新台湾人」といった繰り返される政治的言説の中で、「反共復国」「大陸反攻」というかつてのイデオロギーに代わる国民統一の手法として、正真正銘の「台生」や「台華」²⁰として生まれ変わろうとしている。その過程において、空軍一村は「台湾人」という多文化的国民性を創造する政治空間として位置付けられているのではないだろうか。その意味で、眷村における政治的神話空間は、洪が言うような「減退」にあるのではなく、「再編」といった方が正しいといえるだろう。なぜなら「移民都市」という言説転換の下で、戒厳令下において建設された空軍一村という軍事的空間は、眷村文化歴史探検隊活動にみられるように、多文化社会一般に開かれた国民的空間として再編され、三重市民や後世の人々が王村長の言うように「台湾の」複雑な近現代史を理解する場として開放されているからだ。国民という政治的身体の連続性の下で、生まれと国家の間に広がる隔たりは多文化主義という言説によって包摂され縫合され、そこでは「政治的正確」として「大和解」が議論される一方、眷村の排除と再建が進められている。

しかし眷村というある種の軍事的空間が、1990年代以降の民主化(台湾化)の流れの中で多文化融合の場として

着目される時、そもそもなぜ「和解」が議論されなければいけなかったのか、なぜ多文化主義という「共通善」が要求されなければならなかったのかを考える必要がある。それは「和解」や「共同善」という輝かしい未来が語られることによって、どのような過去が見過ごされてしまっているのかを考えることでもあるだろう。

西川はカナダやオーストラリアなどにおける多文化主義の建国物語には、ある事実が隠蔽されていると述べ、それが「植民地」あるいは「植民地主義」の問題であることを指摘している（西川長夫2006：151）。アボリジニやネイティブ・アメリカンたちの視点から見れば、移民たちは彼らの土地を占拠している侵略者たちであり、「多文化共存による国民統合」は、侵略者による都合のよい欺瞞的なスローガンにすぎないという西川の論点は、少なくとも眷村という特殊な移民形態を考える場合は、そのまま適応出来ない点もあるだろう。なぜならアボリジニやネイティブ・アメリカンたちとは違い、光復後台湾における戦時体制の「継承」は、そのまま植民地体制の継承でもあり、眷村は多くの本省人たちの記憶の中で、しばしば加害者的なイメージとして想起されているからだ。眷村が植民地体制の継承であったとするならば、眷村をめぐる多文化主義の言説が隠蔽しているものとはいったい何であるのか。そこではいったいなにが問われずにいるのか。

ここで着目すべきは1945年という時間軸であるだろう。多文化主義が「政治的正確」によって1990年代以降に生まれたことはすでに述べてきた通りだが、一方でその「政治的正確」を要求させるに到った政治的対立そのものは、両者の相互認識のズレを生み出した1945年にまで遡れるはずだ。『再見忠貞二村』のテレビドラマの中では触れられていないものの、大陸での抗日経験を持つであろう老曲と、台湾において植民地経験を持つ阿發の兄の考える「日本」とは、決して重なり合うことはないものの、両者の対立軸の心底には常に「日本」という記憶が沈殿し、両者の日常生活の中に「ズレ」を生み出し続ける（20時間にも及ぶこのテレビドラマの中で、眷村人、本省人を問わず、一度として1945年以前の記憶が語られる事がないことは非常に興味深い）。

既に述べたように、空軍一村内には旧日本軍の高射砲陣地跡が残っている。昭和十八（1943）年、台湾総督府を防衛するために空軍一村の地下全体に構築されたこの高射砲陣地跡地は、民国六十（1970）年代頃には完全に封鎖されてしまった。しかし現在この高射砲陣地跡地は、眷村文化公園が成立した際には「多文化融合」の場としての利用が検討されているという。

大日本帝国によって建設された軍事施設が、光復後に流入した外省人たちの秩序と安寧を維持するための場として見出され、またそれが多文化主義という言説の中心地として機能するという皮肉は、王村長が述べたように眷村がある意味で台湾の複雑な近代史を象徴しているのかもしれない。「和解」という作業が台湾社会に広がる対立とズレを埋めるために行われるものであるとすれば、その要因となった「日本」という記号の上で「多文化融合」を唱えることは象徴的な儀式であるといえる。

日本植民地をめぐる本省人の記憶と日本帝国主義をめぐる外省人の記憶。社会に亀裂を生み続けてきたこの日本をめぐる記憶とその対立は、多文化主義による「和解」という作業を通じて「台湾人」たち自身の手によって不可視化されていく。そこでは1945年以前の記憶は清算される事なく、新たな国民共同体創造の下で葬り去られようとしている。

「日本鬼子来了（日本鬼子が来た）」。空軍一村に進入した一匹の日本鬼子と、それを目にした村民たち。空軍一村という新たな多文化的国民空間へとほく（＝日本鬼子）が進入することによって顕在化されたものとは、雄弁に語られる未来（「和解」による多文化融合社会）と、それによって沈黙する過去（日本をめぐる「対立」の記憶）の姿であったといえるのではないだろうか。

注

- 1 蒋介石夫人であった宋美齡によって1950年に設立。1964年「中華婦女反共聯合會」に改称。
- 2 眷村の一般的な定義としては、第二次大戦後大陸から台湾に渡って来た外省籍の軍人とその家族たちが台湾各地において集合居住した集落の事を指し、台湾の国語辞典『辞海』の定義に従えば「軍の裁定により、また政府の確定地区において建設され、官兵の配偶者あるいは直径血縁者が居住し、並びにその家庭において業務処理の管理機構責任者を設けたもの」とされている。
- 3 代表的なものとして、新竹の「東光新村」などがこれにあたる。これは日本時代の警察大学宿舎で、民国三十五年（1946年）には要塞司令部が設立され、後に「陸軍砲兵五十四団奉命整編為第二十七軍」が東光新村に進駐することになった。他にも高雄の「誠正新村」な

どもこれにあたる。これは旧日本陸軍の宿舎であり、民国三十六年には鳳山における陸軍訓練指令部が設立された。後に孫立人將軍の「第四軍官訓練班」がこの眷村に進駐することになった。

- 4 このような空前の移民期を迎えた三重市の人口は1949年には34,119人を超え、人口上昇率は実に26.3%にまで上昇した。また外省移民の多くは国民党の台北遷都以降に急増しており、台北盆地各都市の人口を飛躍的に急増させていくことになる。この人口増加は1956年（国民党の大陳島放棄が55年）まで連続的に続く。
- 5 眷村におけるこのような生活形態は、「國軍在臺眷業務處理辦法」（1950）の規定に基づいており、これは当時の戦時体制に基礎をもつもので、台湾各地に展開した国軍部隊を迅速に戦線へ動員するための法令として「集中管理・集中居住」がその基本原則とされていた。つまり国共内戦の延長線上に眷村は建設され、あくまでも戦時体制の継続として眷村があったといえる。このため結果的に多くの眷村がその部隊周辺に展開することとなった。
- 6 人民解放軍による台湾への軍事侵攻を恐れた国民党政府は「台湾省防空疏流實施辦法」（1954）を發布することによって、都市の戦場化とその被害抑制を想定していた。これは中華民國の臨時首都である台北に対する空襲被害を懸念した国防部が国軍部隊を台北市内ではなく、その周辺へと展開させるための法令であり、そのため三重や板橋、とりわけ中和や永和などの郊外都市において建設される眷村の数が急増し、それに伴って物資や人の流れも急速に台北郊外へと向かい始めることになった。『臺北縣志・軍事志』（1960）には当時郊外へと向かう国軍、物資の様子などが描かれている。
- 7 ここでは三重市政府は眷村の形成を「族群の多様性」を「豊富」にしたものとして肯定的に捉えているが、三重には2006年現在五村の眷村があるものの、その全ての取り壊しと「国民住宅」（政府によって郊外に建設された住宅地）への移動が決定されており、その意味では何思暉が言うように「眷村はすでに歴史になりつつある」といえる。
- 8 公共電視台製作ドキュメンタリー『我們同國』「遲暮旅程」からの引用。
- 9 「朱徳を殺し、毛沢東を引っっこ抜け」という当時の反共スローガンの一つ。
- 10 1973年には蔣経国行政委員長（当時）によって「十大建設」に基づく大規模なインフラ整備計画が発表されている。これは日治期、蒋介石政権時代から続く農業・軽工業主体だった台湾経済を重工業主体へ切替える事を主目的とする6ヵ年計画であり、80年代までに、桃園国際空港、原子力発電所、中山高速道路などの諸施設の建設や、造船業、鉄鋼業、石油化学工業などの工業推進が急速に進められることとなった。
- 11 殷寶寧は、同時期すでに高度経済成長を達成し、工業生産拠点を比較的安価な韓国や東南アジア各国に進出させていた日系企業の多くが、台北などの大都市周辺に進出していたことについて触れ、中山北路（旧勅旨街道）や北投などの温泉保養地に多くの日本人「買春ツアー」が訪れていた事実を指摘している（殷寶寧2006：164）。こうした日系企業に代表される外資の積極的な呼び込みが、都市部における労働者のさらなる需要と人口移動を加速させる要因となっていたともいえる。
- 12 ここで林書玄が指摘している乞食街のあった環和南路は空軍一村の所在地と隣接しており、当時多くの乞食たちが空軍一村の高射砲陣地跡の地下壕に住み着いていたという。
- 13 公共電視台製作2006『我們同國』「遲暮旅程」ドキュメンタリーにおける董氏へのインタビューからの引用。
- 14 台湾においてmulticulturalismの訳語にあたるのは「多元文化主義」であるが、本稿においては「文化的多元主義」などとの混合を防ぐために「多文化主義」の語で統一する。
- 15 『再見忠貞二村 A Story of Soldiers』公共電視台製作2004
1950年代末から1980年代にかけて台湾中部の嘉義にある忠貞二村（眷村）を舞台に、邵一家を中心に織り成される人間模様を描いた連続ドラマ。
- 16 陳はこの主観的情緒構造のズレを説明するにあたり、『多桑（トーサン）』（1994）と『バナナ天国』（1989）という二つの台湾ニューシネマにおける本省人と外省人の歴史的経験を分析している。陳はここで主観的な情緒構造はすれ違っていても、客観的な歴史構造においては両者は交わり、重なり生きていることを指摘している。
- 17 憲法修正条例に関しては中華民國（台湾）総統府ホームページにおいて全文記載。http://www.president.gov.tw/1_roc_intro/law_add_86.html
- 18 またこのような概念は当時国民党側からも提出されていた。1998年の光復五十三周年記念談話において、李登輝総統（当時）は本省人や外省人といった枠組みを越え、実際に台湾の地で生活している人々は原住民はもちろんのこと、数百年あるいは数十年前を問わずに「新台湾人」として台湾の未来に責任を負うとする「新台湾人」の理念を発表している。
- 19 民進党の緑に対して、国民党は青のイメージで語られる事が多い。
- 20 故郷への帰還を前提としていた少なからぬ外省人たちは、台湾を一時的な滞在地として認識していたため、孫子の名前に台湾生まれを意味する「台生」や「台華」とつけることが多かったという。眷村出身の作家でもある朱天心は、短編小説『想我眷村的兄弟們（眷村の兄弟たちよ）』（1992）において「わずかな手がかりだけで一目でそれと分かってしまう（眷村の）兄弟」として「台生」の名を上げている。

参考文献

中文文献（ローマ拼音順）

- 國防部史政編譯室2005『國軍眷村發展史－從竹籬笆到高樓的故事－』台北：國防部
- 國家政策資料中心1990『台灣歷史年表』國家政策資料中心
- 何思謙2005『台北縣眷村調查研究』台北：文化局
- 空軍三重一村自治會2006『空軍三重一村回憶錄』台北：空軍三重一村自治會
- 民主進歩党族群事務部編2006『認識台灣眷村』台北：民主進歩党族群事務部
- 王甫昌2003『當代台灣社會的族群想像』台北：群學
- 七年級生2006『我們同國Fellow Citizens』台北：公視基金會
- 人本教育文教基金會2006.10『人本教育札記』財團法人人本教育文教基金會
- 三重市公所編2005『三重市志續編』（上）（下）台北：三重市公所
- 三重市公所編2005『戀戀三重埔－老照片說故事』台北：三重市公所
- 殷寶寧2006『誰的中山北路？情欲・國族・後殖民地』台北：左岸文化
- 朱天心1992『小說家的政治周記』台北：聯合
- 張茂桂2002.3『台灣是多元文化國家?!』『文化研究月報』2002年3月
- 鄭政誠1996『三重埔的社會變遷』台北：臺灣學生書局

中文論文

- 洪醒漢2002『軍事重「地」左營地區政治軍事空間的形塑及詮釋』國立台灣師範大學地理學系第三十一屆碩士論文
- 羅於陵1991『眷村：空間意義的賦與和再界定』國立台灣大學建築與城鄉研究所碩士論文

日本語文献

- 陳光興2002.5『交錯する植民地／冷戦の二重構造』『世界』岩波書店
- 西川長夫2003『多文化主義からみた公共性問題』『新しい公共性－そのフロンティア－』有斐閣
- 西川長夫2006『多文化主義と＜新＞植民地主義』『＜新＞植民地主義論－グローバル化時代の植民地主義を問う－』平凡社
- 若林正文2004.1『台湾ナショナリズムと「忘れえぬ他者」』『思想』

映像資料

- 公共電視台製作2004『再見忠貞二村 A Story of Soldiers』台北：公視基金會
- 公共電視台製作2006『我們同國』「遲暮旅程」台北：公視基金會

From Japanese Military Installations To Multicultural Public Space: Kong-Jung Yicun in San-chong City

KURAMOTO Tomoaki

Abstract:

This article examines Kong-Jung Yicun, a Military Village located in San-chong, a city in Taipei County, Taiwan. Military Villages in Taiwan are village communities that were established by the Kuomintang political party after WWII, mainly for soldiers and their families.

The article first looks at the inflow of mainlanders from China and the formation of Military Villages after WWII, events which can be seen as a result of the civil war regime of the time, which was based on colonial Japanese rule. Then, it considers the population flow from southern Taiwan into San-chong City that occurred in the 1970s, which can also be related to the invisibility of the war regime inherited from Japan.

I also would like to raise the following question. While present day Kong-Jung Yicun is undergoing a transformation to an open public space from being a place that was once off-limits to the general public, and while it conforms to the current national policy in Taiwan of multicultural fusion, what role do the memories of Japanese colonialism, which in the past strategically carved out Kong-Jung Yicun and made it an object of its rule, play now in the formation of this new public place?

Keywords: Military Village, multiculturalism, memory, reconciliation, public space

